

アカシア夜話 アカシアンナイト 第12話 (防災について考える)



平成26年8月20日に局地的な豪雨によって発生した、広島市の土砂災害は、広島市安佐南区山本地区、緑井地区、八木地区と安佐北区可部地区で合計74名の死者を出し、全壊家屋133戸(西区の1個を含む)、半壊家屋122戸など、未曾有の大災害になりました。



八木地区の土砂災害

アカシア会員についても、42回の立川洋二さん、69回の竹内重喜さんのお二人が亡くなられた事をはじめ、多くの方が被災されました。現在も大きな苦難を抱えられている方が、一日も早く平穏な生活に戻れますよう、祈念いたします。

今回はこの土砂災害を受けて、「アカシア夜話」の視点を少し変え、防災について国を代表する研究者の一人である村上處直(すみなお・43回)さんに、これまでの研究の足跡などとともに、防災に対する基本的な考え方をお聞きました。

附属の頃

甲斐：お生まれは名古屋なんですね。村上：そう、僕が小学校にあがって、1年生の2学期から、父が広島高等師範学校の天文学教授になるために、広島にやって来た。当時、天文学教室は、東大、京大と、広島高等師範学校にしかなかったから、喜んでたね。当時父はまだ30代で、高等師範学校教授は附属小・中学校の教官の師学監だから、若造が古手の教官を監督するというので、附属小学校の頃はお年寄りの先生にいじめられたような記憶がある。それに、一つ上の姉、芳野がとても優秀だったから何かというと比較された。4年生の時には担任の先生が変わって、名前を「シヨチ君」って読み違えたもんだから、それからずっと同級生からは「シヨチ」と呼ばれることになったんだ。もう処置なしだよ。難しい名前を付けたのは僕のおじいさんで、鹿児島旧制第七高等学校の教授だった。大学も出ていたわけじゃないのに物理・天文学の教授で、イギリスの学者と波動論でけんかを吹っかけていたらしい。日本を一步も出たこともないのに7ヶ国語くらい読み書きができて、喋っててもいた。植物や昆虫の事なんかめっちゃめっちゃ詳しくて、昭和天皇陛下が若い頃の雑学の先生だったらしい。そういうおじいさんだから「處直」という難しい名前を付けたんだ。甲：中学で石井(泰行)さん(アカシア会名誉会長)や児玉(幸治)さん(元通

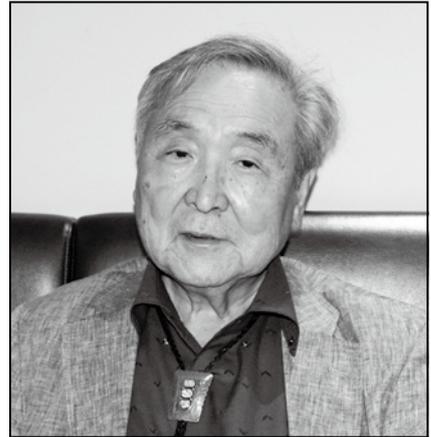
産省事務次官)達と一緒にになれるんですね。村：クラスは違ったんだけどね、僕はまじめな人が多いA組だけど、児玉君はやんちゃなE組。面白いからいまだにE組のクラス会に参加してる。甲：中学から5クラスだったんですか？村：理由はよく知らないけどそうだったね。運動神経もたいしたことないし、足も遅かったけどサッカーばかりやってたね。

高山研究室

甲：横浜国立大学の建築科を卒業後、東京大学の大学院に進学されたんですね。村：数物系大学院の建築音響の教室だった。広島にも僕が関わった体育館があったよ。修士はそこで取ったんだけど、教授が定年退職になり、1962年に近代都市計画学の創始者と言われる高山(英華)先生の研究室に入った。国や都の方から防災問題の会議に人を出せとか言われると、高山先生は、先生が委嘱されている委員の役割を、すべて僕に行ってもらって言うんだよ。研究室に入って間もない頃だから、「何も分かりませんよ」と先生に言うと、「僕が行けって言うからには君が第一人者だ」と。面白いやつが来たよと任せてくれたんだね。結局、高山先生が研究室に残れと言って、そのまま都合10年東大に居た。35才まで、もう大学院を2回やったようなものだよ。その頃になったら僕が居なかったら東京都防災会議だって、自治省の消防審議会だって何も進まなくなっていた。大学卒初任給が1万2千円位の時に、高山先生がポケットマネーから5万円も出してくれた。その間、忙しくて何も論文が書けないでいたんだけど、認めてくれていたんだ。

江東防災拠点再開設計画

村：1970年の大学院在籍中に、建築研究所の中に部屋を借りて防災都市計画研究所を立ち上げた。1964年の新潟地震後、国も東京都も都市防災対策を始めようと



P r o f i l e

村上 處直氏 (43回) 略歴

- 1935年 名古屋市生まれ
- 1960年 横浜国立大学工学部建築学科卒業、東京大学数物系大学院入学
- 1962年同大学院博士課程から都市計画の高山研究室で都市防災をはじめる
- 1965年東京大学工学部都市工学科高山研究室研究員
- 1970年防災都市計画研究所設立
- 1982年サンフランシスコ・ロサンゼルス地震対策アドバイザー
- 1984年アメリカカリフォルニア州SCEPP顧問
- 1985年アメリカカリフォルニア州BAREPP顧問、東京大学 工学博士、広島大学 工学部非常勤講師
- 1986年早稲田大学理工学部非常勤講師
- 1987年関東学院大工学部非常勤講師
- 1988年横浜国立大学工学部教授
- 1996年横浜国立大学大学院工学研究科教授
- 2000年3月同大学退官
- 2001年防災都市計画研究所代表
- 2002年早稲田大学教授(専任客員)
- 2005年3月同大学退職
- その後 日大生産工学部 非常勤講師
- 2010年 退職



江東防災拠点

していた時期で、東京都江東デルタ地区に6カ所の大きな防災公園が出来る事になったんだけど、その計画の始まりは僕の報告書からなんだ。関東大震災級の災害が起こると、昔の木造密集市街地が燃える時の輻射熱は、300mくらいの空き地が無いと延焼を止められない。桁違いなものだった。東京都の江東防災拠点再

開発計画の推進のプランニングボードに中心メンバーとして招聘されて、白鬚東防災拠点再開を計画した。隅田川の岸辺に東白鬚公園ってのを作って、大規模火災が起きた時に、東側の低層な密集住宅街の人たちを公園に逃がしたいんだけど、輻射熱を遮ってやらないといけない。そこで13階建ての住宅団地を1.2kmの連続した防火壁みたいにしたい。さらに、東側のベランダにシャッターが下りたりするんだけど、火災でガンガン熱が来ると中から燃え始めてしまう可能性があり、人が公園に逃げる為には防火壁の住宅が燃えちゃあだめなんで、それでシャッターの外に水をかける事を提案した。まあ、防災の研究って、机の上でいくら考えてもだめで、災害現場に行っているいろいろ聞いたり、過去の実例を調べたりしていると、比較的簡単に色々な事を思いついて、良い発想ができるんだよ。この白鬚東の事業は工事費の3割アップを大蔵省に申し入れ、獲得した3割アップに相当する新しい計画を練るのだけれど、大手設計事務所のメンバーでは新しいアイデアが出ない。結局、専門家の知恵を借りながら、殆ど僕一人で進めて行った。

人との出会い

村：初めて僕が海外の災害現場に単独で行ったのがニカラグアなんだ。朝日新聞の特派員という立場でね。**高山**先生が「一人で行くって死んでもわからないぞ」というので、昔、防災計画研究所の副所長をしていた**平井**君と二人で行ったんだ。現場を回るのに、大使館が出してくれた許可証を持って動いたけど、レベルが低いので、家の中まで見る事が出来ない。そこで、当時の大統領の**ソモサ**氏の私邸まで、もっと全部見えるようにしてもらおうと掛け合いに行った。庭で地震の後処理のため、毎日円卓会議をやってるんだけど、スペイン語もわからないし、門番に阻まれていたら、**百瀬**恵美子という、メキシコオリンピックで日本の女子選手村の村長をやった人が出てきて、うまく紹介してくれた。村長をやった時はメキシコ大学のスペイン語科の学生だったそうなんだけど、一番若くて女性だから世

界中のVIPが彼女のファンになったらいい。そうしてニカラグアでうまく調査が進んで、その後の地震でも一緒に組んで色々な所に行った。1985年のメキシコ地震の時も、**百瀬**さんが紹介状を事前に送ってくれているから、現地では僕が何者かとよく理解していて、到着したらVIP待遇で、建設大臣なんかも待ち構えていた。彼女は本当に世界のVIPと友達だからね。

横浜国大の教授になった時、国立大学の教授は、地震だからってすぐには現地に飛び出すという訳にはいかないんだ。それを、四谷の飲み屋で一緒になった**阿部**充夫さんという当時の文部事務次官が、どうやったら飛び出して行けるか相談に乗ってくれて、横浜国大に出向している文部省のトップの事務官に電話してくれた。それで大学に帰って「聞いた?」とか言ってね。振り返ってみるといろんな人との出会いが、僕の支えになっているんだ。**甲**：お人柄が人を引き寄せるんでしょうね。

防災は可能か?

村：海外で「防災計画…」という肩書の名刺を出す時必ず言われることがある。災害そのものを完全に防ぐのは不可能なのではないかという事なんだ。日本語では「防災」と言うのだけれど、「減災」と言った方が正しいのだと思う。**甲**：全く被害なく災害をやり過ごすのは無理だという事ですね。**村**：災害が起きると、土砂崩れだと砂防ダム、噴火だとシェルターのようなものを作って、対策をしたと言いがちなんだが、それでは全く不十分だ。大規模な災害が起こった時には多少の役には立つでしょうが、被害を全く食い止める事が出来るかと言えば、おそらく無理だと言わざるを得ない。大切なのは「己を知る」という事なんだ。今回の大規模土砂災害で言えば、山際に住んでいれどどういう危険があるか地域の人たちが良く認識して、予め災害が起きた時にはどうやって助かるか、対策を考えておくことです。それとっと大事なのは、山の面倒を見るという事です。面倒を見ていれば山の状態もよく分かるし、時間はかかるけれど保水力を高めたり、

崩れにくいような山になるよう手を入れる事もできる。もちろんどういいう危険があるかも、よりよく分かる。これは結構手間のかかることなのだけれど、神戸あたりではうまく機能しているんだ。阪神淡路大震災によって、六甲山系は地中に多くのひび割れが生じていて、土砂災害が起こる可能性が高いと言われているのだけれど、六甲山では住民がNPOで、ボランティア団体を作って山の手入れをしている。山持ちが一人じゃできない事を皆でやっている。ここは防災林にしようとか。それだけじゃなくて山全体をなだめる。弱点を知って、水の流れがあるところは、うまく水抜きをしてやるとか。本当に泥と水は怖いよ、山が崩れる時はすごい迫力だものね。**甲**：地道な事だけれどこういう事が、災害の際、被害を減じる手立てになるのでしょうか。



八木地区の調査 中央が村上氏

編集を終えて

村上先輩は、杖をついてはおられるものの、一旦、大事が起きればすぐにでも飛んでいくぞという迫力をお持ちの方です。そして、色々なことに興味津々で、お話を伺っていても気になることがあるとすぐに質問が飛んでくる。この興味津々なところが、災害現場で一見小さな事柄も見逃さず、現実には即した提言をされる源なんだろうなと思いました。

でも、話がどんどん飛んでいくので編集がとても難しく、先輩の思いを十分伝えられたとは、とても思いません。力不足を思い知らされました。

文責・編集：甲斐 稔(63回)

編集補：吉野かおり(79回)

医療法人社団 朋和会
西広島リハビリテーション病院
 3病棟139床で365日毎日高密度な入院リハビリを行う専門病院です！
 (財)日本医療機能評価機構認定病院
 介護老人保健施設 居宅介護センター 訪問リハビリ 健康開発センター
 〒731-5143 広島市佐伯区三宅 6-265 TEL: 082-921-3230
 URL: http://www.welnet.jp/ FAX: 082-921-3237
 病院長 岡本 隆嗣(84回生) 理事 林 篤彦(39回生) 医師 岡田 昌信(63回生) 医師 今村 世津(85回生)

医療法人 光臨会
荒木脳神経外科病院

 理事長 荒木 攻
 院長 沖 修一
 事務部長 松下 督克(75回)
 麻酔科 森川 真吾(79回)
 理学療法士 栗原 彩子(93回)
 広島市西区庚午北2丁目8-7 TEL 082(272) 1114
 http://arakihp.jp/